法学部教員
研究テーマ集

かわい　まさひろ
川合　全弘
法学部　教授
法学修士
政治思想史

主要な研究業績

□著書、単著『再統一ドイツのナショナリズム――西側結合と過去の克服をめぐって――』
ミネルヴァ書房、2003年4月。

□訳書、単訳　エルンスト・ユンガー（川合全弘訳）『労働者――支配と形態――』
月曜社、2013年8月。

□訳書、単訳　エルンスト・ユンガー（川合全弘訳）『ユンガー政治評論選』
月曜社、2016年5月。

最近の研究業績

□論説、単著
一軍人の戦後――岩畔豪雄と京都産業大学――上・中・下
産大法学、50巻1・2号、51巻1号、53巻2号、2017年1月、2017年4月、2019年7月。

□論説、単著
京都産業大学世界問題研究所五十年外史
1966~2016
京都産業大学世界問題研究所紀要、33巻、2018年3月。

□論説、単著
エルンスト・ユンガーのナショナリズム論――ナチズム観の特徴とその変遷――
権左武志編『ドイツ連邦主義の崩壊と再建――ヴァイマル共和国から戦後ドイツへ――』、第六章所収。
岩波書店、2015年12月。

学外における活動

□公益財団法人松口奨学会
奨学生選考委員

□研究テーマ

ドイツ・ナショナリズムの政治思想

□研究の取組み

私の狭義の専門は現代ドイツ政治史・政治思想史である。これまで、第一次世界大戦後におけるドイツ・ナショナリズム思想や当時そのような思想の文学的代表と目された作家エルンスト・ユンガーについて、またナチズム期におけるドイツ・ナショナリズムの諸相について、さらには再統一後におけるドイツ国民意識の行方について研究をしてきた。二度の世界大戦とその敗北によって、ドイツ人の国民的自尊心は高揚と毀損、反省と反発を繰り返してきた。幾重にも傷つき、分裂したその自己意識が一体どこに向かうのかを、幾人かの代表的ないし典型的な人物を通じて考えることが、研究の主たるテーマである。

このようなテーマに対する関心の発端は日本人たる私自身の中にある。ドイツと日本の歴史は、多くの点で異なるものの、西欧ないし欧米諸国にやや立ち遅れ、それゆえそれら諸国への強い対抗意識をもって近代国民形成に着手した点や、わずか一世紀ほどの間に急激な発展と深い挫折を経験した点において、濃密な共通性を帯びる。強く立派な国民たろうとして挫折した両国民は、第二次世界大戦後にはそれへの反省から、大雑把に言えば、等しくそれと正反対の選択肢、つまり立派な国民たることを断念し、かけがえのない個人や善き人間たろうとする途、要するに脱国民化の方途を選んだ、と言える。この国民的選択とその帰結としての現在とに対する疑念が私の研究テーマの当初の動機である。日独両国民の政治的現在を歴史的に対象化すること、それを通じて過剰と放棄の両極端に走らない国民意識の正しいあり方を探究すること、これが私の研究テーマに一貫する関心である。

近年、研究の対象をドイツから日本へと拡大してきた。目下、戦中期陸軍幕僚層を代表する軍人の一人、岩畔豪雄を対象として、日本人が大戦とその敗北とをどのように反省してきたかを考察している。戦後日本人の国民意識には大戦経験が濃い影を落としており、国民意識のあるべき姿を探究する上で、大戦経験の総括が不可欠と考えたからである。

上記の研究は、私が担当する講義科目（西洋政治史、西洋外交史）とも深く関わる。私が思い描く政治史学は、政治を人間社会に欠かせない、宿命的な営みとして重視すること、近代国民形成を政治の近代化の本筋として捉えること、そして現在を正しく導くためには現在を歴史的に理解することが重要であり、日独両国民のような敗戦国民にはそれがとりわけ必要であること、これらの認識を土台とするものである。世界の政治的現状、とりわけ至るところで跋扈するポピュリスト的動向を見るにつけ、我々が正しい仕方で近代国民であるべきことは、けっして用済みの過去でなく、むしろ依然として未完の重要な課題である、との思いを強くする。これは、これからの困難な時代を生きる学生たちにとっても人格形成上の重要課題である、と考える。